

# 第二回 當選短編小説

第一二等

渡守

海賀變話

上

『はう、夫りや何ぢや、イヤ何と言はつしやる、大島の嫁御寮が、あの家出を。』  
 『去れば、つい今し方よ。』  
 『はての！と渡守の勘六、爐端に大胡坐、燃えさしの櫛をせりながら、ちらりと相手の顔を見流した、年輩五十五六、前額は禿げ上つて、兩小鬚に少し許残つて居る胡麻鹽髮を、ぐいと根上りに引詰めて、膳頂にちよんぱりと申譯の鬚がある、顔色は瀧紙のやうで頰骨の隆い口の巨きな、眼の鋭い、肩の張つた胸の廣い、昔は

小相撲の一つも取つたらふと思はれる骨格は、瘦せて枯れても渡守の勘六である。

『したが五作どん、俺りや最う合點が參つたわい、イヤすんと了解ました。』

『了解たとは、何う？』

『はて、想像つても見さつしやれ、大島様と言ふたら此村で數代の大島主ぢや、其家の嫁御寮ともあらふものが、何が不足で出て行かうぞい、白壁造りで取り廻したあの大廈は、およそ此川一つ越して來た者は、誰でも先づ眼につきますわ、何がさて、土藏といへば過般新規に建つたを合せて四戸前、ねから錢金も紙幣も一度ある土藏に入れられたら、最う夫限ぢや、金輪際日の目も見いで、ぱつたり通用が停止りますわ、聞かつしやれ昔さるお邸でぢや、夜なく怪性の物が表はれるといふ評判で、誰とて三日と住附く者がない、其また變化が何かと言へば、絆の袴に十二一重着た、いやも美くしい上膚と、衣冠正しい公卿の姿が、丑満過る頃と成ると二階から椅子傳ひ、一人降りれば一人昇り、行き違ひくて、世に出た目出度い、世に出た目出度い、と言ふかと思へば、すゝり泣をするぢやげな。』

『はてね。』

『夫見た者は一刻も居堪らんか、皆這ふの体で逃出すぢや、すると一人氣強い者があつて、何でも其変化の正体を見露はして呉れうと強い意氣込で、そこな邸を借受けて、室内は残らず實家へ預けて自身一人、下坐敷に眠つて居ると案の定、丑満とも覺しき頃、さやくと櫛を摺る音がして、そりや、世に出た目出度いぢや夫が十回廿回いつ果るとも見えなんだが、やがて何處かで鶏の聲が聞こえると、夫なりけりにはたりと止で丁ふたさうな、そこで考へた、是りや何でも二階の内に、物の祟りが密んで居るに相違ない、得て古い家には斯ういふ事があるものぢや、よし、明日は本躰を見届て呉れうと、其夜は其儘眠つて、翌日は二階を隈なく、

隅から隅まで搜したなれど、別に怪しい事もないぢや、すると押入の一隅に不圖眼を注げた、細長い小箱が煤まみれに成つて有つたで、何ぢや知らぬと取出して塵を拂ふて、切れくに成つた紐を解いての、先づ蓋を取つて見て驚いた、いや變化の正体もさらりと相判つた。』

五作解せぬ顔、『そりやまた何だね、』

『やがて十年も取出さなんだと思はれる、一對の内裏雑ぢや、不思議な事には内裏様もお妃様も、充溢に涙を滾して御坐つて、頬の胡粉も、班に剥げてあつたさうな、年々の三月必ず出して祭られねば成らぬ身が、住み代りへ、誰が置いて行つたと知らねば、心付て取出す者もない故に、雑様も堪り切れぬぢや、そこでそりや世に出た目出度いとな。』

『いかさま！』

『此人は心掛が宜い、やれお氣の毒な定めてお氣鬱であつたると、直ぐ取出して其三月に、立派に飾り立て、お祭りをしたと思はつしやれ、變化も夫限り。』

『ふむ、夫から何うした。』

『いやさ夫で市が榮えたといふ事ぢや。』

『何の事つた馬鹿々々しい、この忙しい中で下らない話を、わる長く引張たもんだ。』

『何さ是りや譬諭ぢや、雑でさへ其通り、况して尊い金錢に微を生やして藏ふて置ては、何と冥加ないでは無

からふか、金も定めて此世の風に當りたかる。』

『其執念で、御寮が家出をしたと言ふのか。』

『まあづ、そちらの見當ぢやな。』

『いや夫ならば士蔵へは手が届かずとも、身の廻りの一函や二函持つて出さうなものだに、着のみ着のまゝと

は何うだ、御寮が出ても、肝心の金が出すれば、矢つ張り世に出た目出度いの類ぢやないか。』

『なに、着のみ着のまゝで、はて面妖な、して見りや俺が算當は違ふたか。』

五作は高笑ひ、アツハツハ、イヤ氣樂なもんだ、此方の考へは何時も其處らだ、先づ聞かつし、是りや容易

ならん事だぞ、此方は知るまいが、あの御寮には疾うから情夫が附いてあつた。』

『やツ。』

『實家で長年使つた芳松よ、あれがその牛蟲なるものだて、何んと、嫁入前の大切な身體を、虫が喰つたと噂

が立つては最う取り返へしの付く事つちやない、殊には大島様から達ての懇望、支度金は三千兩夫聞た兩親は

またとない良縁だと、娘にも言ひ聞かせ。』

『やれ、生木を裂いたか。』

『左うだ、處で輿入が昨日の晩、夫につけても兎角油斷のならぬはあの芳松、目と鼻の間に居ては、何うまた

不了箇が起らるものでもないと、其日の内に暇を呉れて路銀も持たせて、國へ立たせた、此方知つて居るか。』

『お、今日の晝過、此渡を越した二十歳格好の色白な。』

『お、さ、其生つ白けた野郎だわ。』

『定めて行きとも無かつたぢやろ。』

『無いの有るの、沙汰かい、主人の娘を誘惑して私通する様な恩知らずだ、全体寶卷にして大川に抛り込で遣る可き處を、路銀まで持たせて遣つたのは、格別の目翻しだ。』

と五作斜に構へた、是は強ち大島に雇はれて居るのだから、爰に主人の爲とあつて、忠義口を利くばかりで

も無いらしい。

「言ふて見れば、そんなものかい。」

と勘六は重々しい。

「其處で斯様に惡魔拂も仕て了つたので、先是天下泰平と、俺始め思つて居た、處がお爺。」

『情夫の跡を追ふたか。』

『其通!』

と五作は首肯て膝頭に、爐端を刻み寄り、『それで先づ、芳松の跡を追つたとすれば、此道より外はない、必定渡船を越さうから、五作汝鳥渡行つて勘六に克く言つて來い、御寮が爰に見えたら、たとへ何と言ふとも決して川を越さす事は成らぬと、吳々も言ふて來いと、旦那殿から言ひ付かつて、俺が態々使に來た。お爺、ねかるまいぞ。』

勘六は呑込顔、宜う御坐る、氣遣ひない、俺が斯うして渡を預つて居る間は、小虫一疋通す事つちやないだ。』

『だがお爺、何う服装を替へて來やうも知れぬ、甘々一杯頂くなよ。』

『アツハ、御大層な、勘六の眼は、まだ黒う御坐るよ。』

『ひ、是りや念が入り過ぎた、どりや、俺は是から川筋を一廻りして來にや成らぬ、ぢやあしつかりと頼んだぞ。』

と五作は立上つたが、またぢろりと下眼に見て、

『お爺、言ふまでもないが、此方萬一取逃しでもしたら、そりや、解雇に成るせ。』

と平手で我頭を丁と叩いて、其儘に、戸口を開けた、途端に颶と吹込む夜風に、燃え残つた梢の火は、ばつと煽つて烟は眞ともに、勘六の顔を打つた。

『ほう。』と身を捻つて眉打顰め、

『是りやまた降かの。』

『雪でも來なけりや宜いが。』と捨言葉に仰ぎ見た、五作は一足戸外の方。

## 中

今一人を對岸へ渡して、歸つて來た勘六は、寒さうに掌で涕汗すゝりながら、爐端に兩脛踏はだけで、消え残る櫓をさしくべると、一しきり、熾に燃え立つ炎の餘波に、梁の煤ゆらめいて、ばらくと落ちて來た。

『お松、お松、これ婆さや、ほい最う寝たか。』

と及び腰に屏風の裡を覗き込んで、また少時、胸毛あらはに寛ろげてあたつて居たが、

『この寒さでは、最う越す者も無かる、どりや俺も。』

と獨言ちて押入から取出した煎餅蒲團、二つに折つて爐の傍へ、木枕高くころりと其處に、寝るが早いか高軒。

\* \* \* \* \*

で叩くやうである。

『モシ……モシ……と二度ばかり、ひそめく聲に、むつくりと首を擡げた勘六は、腹ん這ひに頬杖支いて、聞耳立てた。

またほととじと音がして、『モシ……』とすがれた呼聲。

『なんぢやモシぢや、はて面妖な、と首捻り、

『渡守の老爺が許へ、モシとは強い懲懃ぢや、用があるなら遠慮なしに、引開けて這入らつせえ、盜人を見括つた舉動ぢやないが、てんで取られる物件がないで、ついぞ鎖鑰をしませぬぢや、對ふて右へと引けばひ開さます、出迎は面倒ぢや。』

と持つて生れた高調子に、つけ／＼と言つて退ける、戸外はいよ／＼密めいて、

『あの、遅く成つて済みませんが、情願島渡お渡しなさつて。』と是は媚いた女の聲。

『おゝ、お客人か、さりとはお氣の毒ぢやが、渡は最う止りました、亥刻からは越しませぬ、明日御坐れ。』

と言ひ捨て、またころりと横になる。

戸外は遺る瀬なげに、『左うでも有りませうが、限つて今夜中に越さなければ、成らないので御坐いますから御面倒でも。』

『はて、判らぬ人さんぢや。』とまたむつくりと寢返つて、枕元の煙管筒を片手伸しに取りながら、

『亥刻は今先刻打つたぢやないか、法度を破れば、俺が此村を逐はれますわ。』

『左う聞ては猶の事お氣の毒様ですけれど、見つかりさへしなければ、夫でも事は済みませう、渡錢は三層倍

でも五層倍でも上げますから、情願お慈悲にお渡し成さつて、モシ、勘六さん。』

『まて／＼、俺が名を知つて居る、此方は全体何ぢや、夜更小更になま若い聲は、はて狐狸が御坐つたか、夫ならばこちや年喰ふた狸老爺ぢやに、友喰ひして何うさつしやる、面倒ぢやが一度と來ぬやう、どりや、本躰の見届て呉れうか。』

と臆効氣に立上つて、大股に戸の傍へ、何か心に合點きながら、カラリと引開れば、残んの帽の薄明りがぱつとさして、外は夜目にも夫と目につく、緋鹿子の手柄も初々しい大丸齧が、さつと開いて闇に隠れた。

勘六すがめて打眺め、『此方は、ま、全体誰ぢや、今時分單獨で此川を越さうといふは、何ぞ仔細が有るであろ。』

『はう。』  
闇の中から聲細く、『はい、儂は大島の、さとで御座います。』

『辛らい切ない義理があつて、何うでも今夜この渡を越さなければ成りませぬ、人目を忍んで逃る身が、明白に名前まで言つてお頼み申すは、お前様より外にはありませぬ、其處をお察し成さつて、情願儂を……』

と跡はす／＼泣く聲ばかり。  
『ふむ、』と首肯いたが、四邊の氣色を窺ひながら、『勘六聲を低うして、  
嫁御寮、俺が厭ぢやといふたら何うさしやる。』

『えツ？』

『いやさ、何うあつてもこの渡を、越さぬと僕が言ひ張つたら、此方何うさつしやる。』

『左う成つたら儂は最う、明日とも言はず、この川で。』と女は聲に震ひを持つた。

『なんと？』

『し、死で了ひます。』と思ひ込だ語調である。

『お、夫までに思ひ詰たら、いかにも渡して進せましよ。』

『叱ッ、静女は氣疎く、えツ、夫なら直ぐに？』

にさつしや  
れ」と制し  
ながら甲斐  
妻しく、  
尻端折に頬  
冠りすつば  
りと、片手  
は棹を片手  
は女の手を  
取つて、早  
くも汀へ下  
り立つた。  
鼻抓まる  
るも判らぬ



\*眞闇な暗の  
川端、今し  
も岸を離れ  
た船一艘、  
棹を戻して  
艤に手をか  
けた勘六は  
船の真中に  
しょんぱり  
と蹲踞つて  
居る女の姿  
を、覗くや  
うに透し見  
て、  
『言ふまで



時もありま  
したちや、  
夫も怡度、  
お前様の身  
の上と似た  
り寄つたり  
庄屋様の惣  
領娘の、  
お松ちうを  
教唆して、  
婚禮のある  
其晩に突走  
つたも、四  
十年の昔で  
御坐るよ。』

もない事ぢ  
やが、男は  
大切にさつ  
しやれよ。』

『はい！』  
と女は言ふ  
がまゝであ  
る。

『今でこそ  
この通り、  
枯木見るや  
うな僕等ぢ  
やが、是で  
も一度は花  
を咲かした  
勘六はしんみりと、

『其のお松といふが、今でも僕と連添ふて居る、あの婆様ぢや、彼女も其時僕が事を思ひ切つて、嫁入を済まし

たら、今頃は實にはや、箸より重い者も持たぬ、樂隱居の格であらふに、僕がやうな者を思ひ詰めたばかりに  
勘六はしんみりと、

の年に成るまで、日々毎日鋤鍬をたげて稼ぎます、僕もあれ程な無分別を仕出来なんなら、今これ程に、落魄はせなんだぢやろと、時々には思ひ出しまで仕ますぢや、したがお前様、おら此の年でこの稼業が、何の苦にも成りませぬ、うんにや、負惜みぢやありませぬわ。』  
『ゆらり／＼と漕ぐ船は、今川の中心に來た、と見ると俄かに羽音高く、流を亂して一羽二羽、續いで三羽五羽六羽、夢破られた水禽が川下へ飛去つた。

跡はまた寂莫。

『色戀は若氣の内だ、老年寄ると味も香も脱け去つて了ふといふは、そりや眞實の戀ぢやない、僕等がやうに肚臍の底から思ひ込だ戀ならば、一生百年變りませぬ、見なされおらが婆様を、頭は白髪皺だらけで、元の姿はとんと早や、夢にも今は見られぬけれど、心は昔のお松つ子ぢや、僕も早やこの通り、腰も曲めば艶氣も失せて渾びました、鼻の先から何時もかも、水つ涕汁垂らかして居る態は、二目と見返へる者もあるまいが、猶且婆様は昔のやう、勘六さん言ふて、可愛しがりますぢや、毎晚一杯づゝ引掛けは婆様と昔話にも、克う突走つた、あの時まかり間違ふて、別れ／＼に成つたならば、今のこの樂みは無からふと、いつも斯う言ひますぢや、お前様の前では異な事ぢやが、ついこの間此川で情死がありました。まだ生若い男と女と、帶でしつかと身躰をくし合ふて、ふわり／＼と浮いて居ますぢや、村の奴等は口々に、やれ阿呆よ糞白痴と言ひましたが、僕が思ふにや、何うで思ひ合ふた中が首尾克う行かずば、死より外はありませぬ、なま中辛らい義理ぶつて、別れ／＼て居る内に、互の氣心が變つて來たら何と成らふぞ、一度思ひ込んだなら、死ぬまでも押通すが、眞個の戀といふものぢやと、斯う思ふたで、おら我知らず大聲出して、汝等出來いたぞと、譽めて遣りましたぢや、お前様何と思はつしやる、戀には義理も舍利もない、一度で思ひ切りが付くやうな色戀なら、てんで冒頭か

ら立障らぬが宜いでがす、思ひ詰めたら何處までも、深山の奥ちう唄さへ有ります、大島から今さきの先刻、五作が来てやく／＼の言ひ付もある上と、規則を破つて渡しますも、昔を今に思ひ合せて、お前様への僕が寸志ぢや。』  
『語る時、早や岸は間近に成つた、勘六は棹を取上げて、  
『そーりや、當りますぞ。』

## F

『お爺、お爺、これ勘六』と戸外から遠しい。  
『え、誰ぢやい騒々しい、渡船なら疾うに止つた、明日御坐れ。』  
と勘六は悠々たり。  
『誰もないものだ、お、おれだ、五作だ。』  
『お、五作どんか、何で今時分。』  
と居直る内、五作は内へ這入つて來て、勘六を兎見斯う見、  
『お爺、來たらふが。』  
『來たとは、何が?』  
『え、一件だわ。』  
『はて、一件とは。』

『判らないか、大島の花嫁が、只た今この渡場に。』

勘六はきよとんとして、『とんと氣付かなんだが。』

『とは脱けさせないぞ、彦造許のお米つ子が、慥に道で逢つたと言つて居た。來たは爰より外にない、お爺、隠すと爲に成らないぞ。』

と五作は眼を光らせた。

『おいやい、でも俺が許へは、鼠一頭這入りやせなんだ。』

『おゝ、入れは仕まいが、川は慥かに渡したる。』

『何ぢやと……。』

『そりや、其棹の水先が五尺餘り、濡れて居るが、慥な證據だ。』

『やッ……。』

『まだ遠くは行つちや居まい、さつお爺、鳥渡、渡せ。』

『そりや成らん、亥刻からはお法度ぢや。』

『へ、吐くな、己が勝手で破つて置て、お法度だもないものだ、達て汝が渡さずば、俺にも腕と脛があるぞ

と。』

と言ふより早く、立上つて棹搔込み、戸外の闇を一文字、川端へ下り立つて、咄嗟筋を解かふとする、

背後にすづくり勘六が、『待て、俺が預つた渡船に、指でも一本指して見ろ、膽つ玉の宿替さすぐッ。』

と、骨を刺すやうな鋭い聲、五作は屹と振り返へつて、

『老耄ツ、汝等が歛手に乗る俺がい、邪魔こくなメ。』



と棹真向に振上げて、打て懸るを引外し、手元近く踏込んで、無手と掴んだ襟髪は、瘦せて枯ても勘六老爺、

『強突張めツ。』  
と一喝凄く、突放して腰の番を丁と蹴ればたゞくと、二足三足、踏應へのない粘土の上を、つるりと外して、五作は川へ眞倒さま。

\* \* \* \* \*

『勘六さあ、何うさしやつたね。』

おろめくお松に手早く支度させ了り、ぐいと其儘引立つて、

『お松よ、おれについて、斯う來さい。』

と言ふも忙しい聲の下、燈火蹴つて黑暗々、  
流るゝ水の行末に、身の運命を委せて爰に勘六夫婦、ひらりと飛乗つた渡船、弓手に取つた銃一挺、振上る  
が早いか、はつしと繩を断ければ、船は其儘するゝと、岸邊の枯芦押分けて、流について二三間浮み出た。  
船の音早し、風寒し。

(完)